

○講談は

『歴史にまつわるお話を、自分が見て来たかのように起承転結に沿ってお話する日本の伝統話芸』。

演者の前に「釈台(しゃくだい)」という演台を置き、「張り扇(はりおうぎ)」で調子を取りながら美しい日本語を駆使し、観衆に対して読み上げる芸能です。



一龍齋貞鏡

○プロフィール

実父に講談師・八代目一龍齋貞山、祖父に七代目一龍齋貞山、義祖父に六代目神田伯龍を持ち、世襲制ではない講談界において初の三代続いての講談師

平成20年1月一龍齋貞山に入門、同年4月前座となり名を『貞鏡』

平成24年2月二つ目昇進、令和3年貞山死去により一龍齋貞山の預かり弟子となる令和4年度(第77回)文化庁芸術祭賞新人賞受賞

令和5年10月真打昇進予定

赤穂義士伝、軍談、武芸物、怪談、連続物、ピアノを弾きながら講談を読むピアノ講談やお子様向けの紙芝居講談、日本全国土地にまつわる講談を読む

・三児の母

ほういち

「耳なし芳一」はこんなお話

むかし、阿弥陀寺という寺に、目が見えない芳一という男がいた。芳一は、琵琶を弾きながら、平家物語を語って聞かせるのがとても上手だった。特に平家の最後をえがいた「壇ノ浦の戦い」は評判で、鬼もおもわず涙を流すといわれるほどだった。

和尚が寺を留守にしたある夜、一人の男が芳一を迎えにやってきた。その男は、「主は、高貴な方で、芳一の琵琶を聞きたいと望まれている」と言う。

屋敷に案内された芳一が、壇ノ浦の合戦の様子を語って聞かせると、集まっていた人たちはたいへん喜んだ。芳一は七日七晩の演奏を頼まれて、夜ごと出かけるようになるが、「このことはだれにも話してはいけない」と口止めされる。

和尚は、芳一が毎夜一人で出かけ、明け方に帰ってくることに気付き、芳一を心配して、寺の男たちに後を着けさせた。すると、雨の中、芳一が一人、平家一門の墓の前で、琵琶を弾き語っている。驚いた男たちは力づくで芳一を寺に連れ帰った。

芳一からこれまでのことをすべて聞いた和尚は、このままでは芳一が平家の怨霊に殺されてしまうと思うが、今夜も出かせなければならない。そこで和尚は、怨霊から芳一を見えないようにするために、芳一の全身にお経を書き、芳一には怨霊が何をしても絶対に音を立てず動かないように言い聞かせた。

その夜、芳一が一人で座っていると、いつものように武者が芳一を迎えにきたが、武者には芳一は見え、名を呼んでも返事がない。そこで武者は「ここへ来た証として、この耳を持ち帰るとしよう」と、芳一の頭から耳をもぎ取っていった。

明け方になって帰ってきた和尚は、芳一の様子に驚き、お経を耳にだけ書き忘れたことに気付き謝った。その後、平家の怨霊は二度と現れず、また、腕の良い医者の手当により、芳一の傷も間もなく良くなった。この不思議な出来事は広く知れ渡り、また芳一の琵琶の腕前も評判になり、いつしか「耳なし芳一」と呼ばれるようになった。

講談&

スペシヤルトーク

初めての講談を楽しむための解説付き

子どもから大人までお楽しみいただけます。

「耳なし芳一」 ＋ 一演目

何のお話かは当日の
お楽しみ！

※会場での飲食、写真撮影、録音、録画は、ご遠慮ください。

※屋外で開催しますので、暖かい服装でご来場ください。

新型コロナウイルス感染症の

感染防止対策のご協力とお願い

○来場時には、手指の消毒、マスクの着用、入場前の検温等にご協力ください。

○発熱、咳、喉の痛みなど体調が良くない場合は、ご来場をお控えください。

○周囲の方と十分な間隔を取り、会話はなるべくお控えください。